

世界の教育はどこへ向かうか

PISAデータ、探究、主体性、
そして「第4の道」への診断



東京科学大学
元文部科学省

(出典：中公新書『世界の教育はどこへ向かうか』)

本日の論点：5つの視座

01

諸外国の教育動向

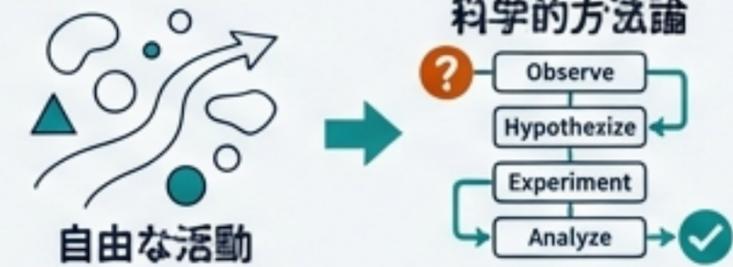
PISA 2022の現実とアジアの優位性



02

「探究」の再考

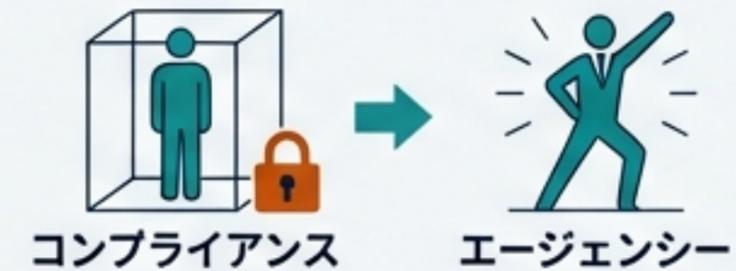
自由な活動から科学的方法論へ



03

「主体性」の正体

コンプライアンスからエージェンシーへ



04

カリキュラム・オーバーロード

コンテンツ主義の限界と解決策



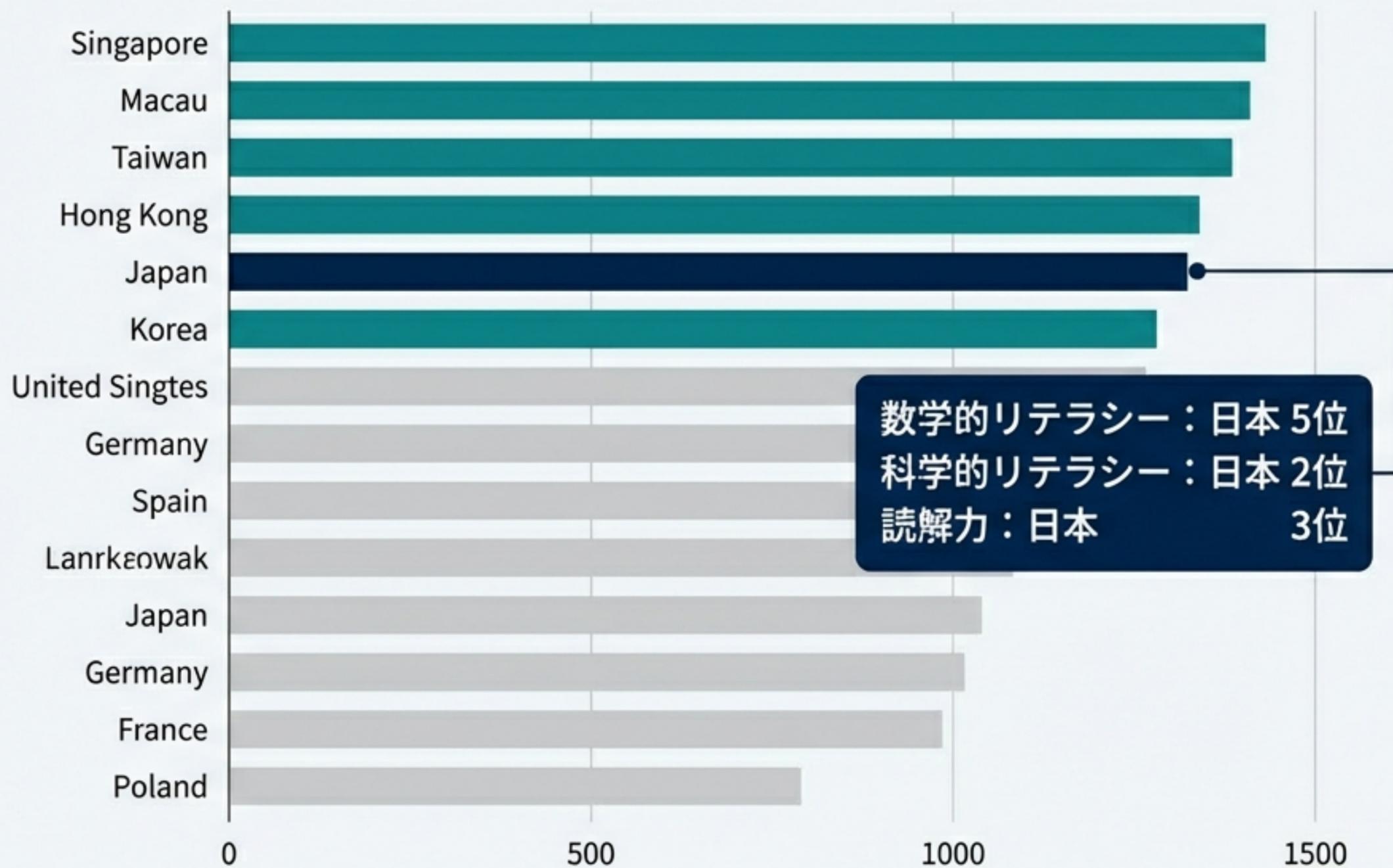
05

教育の未来

学校をエコシステムへ変える「第4の道」

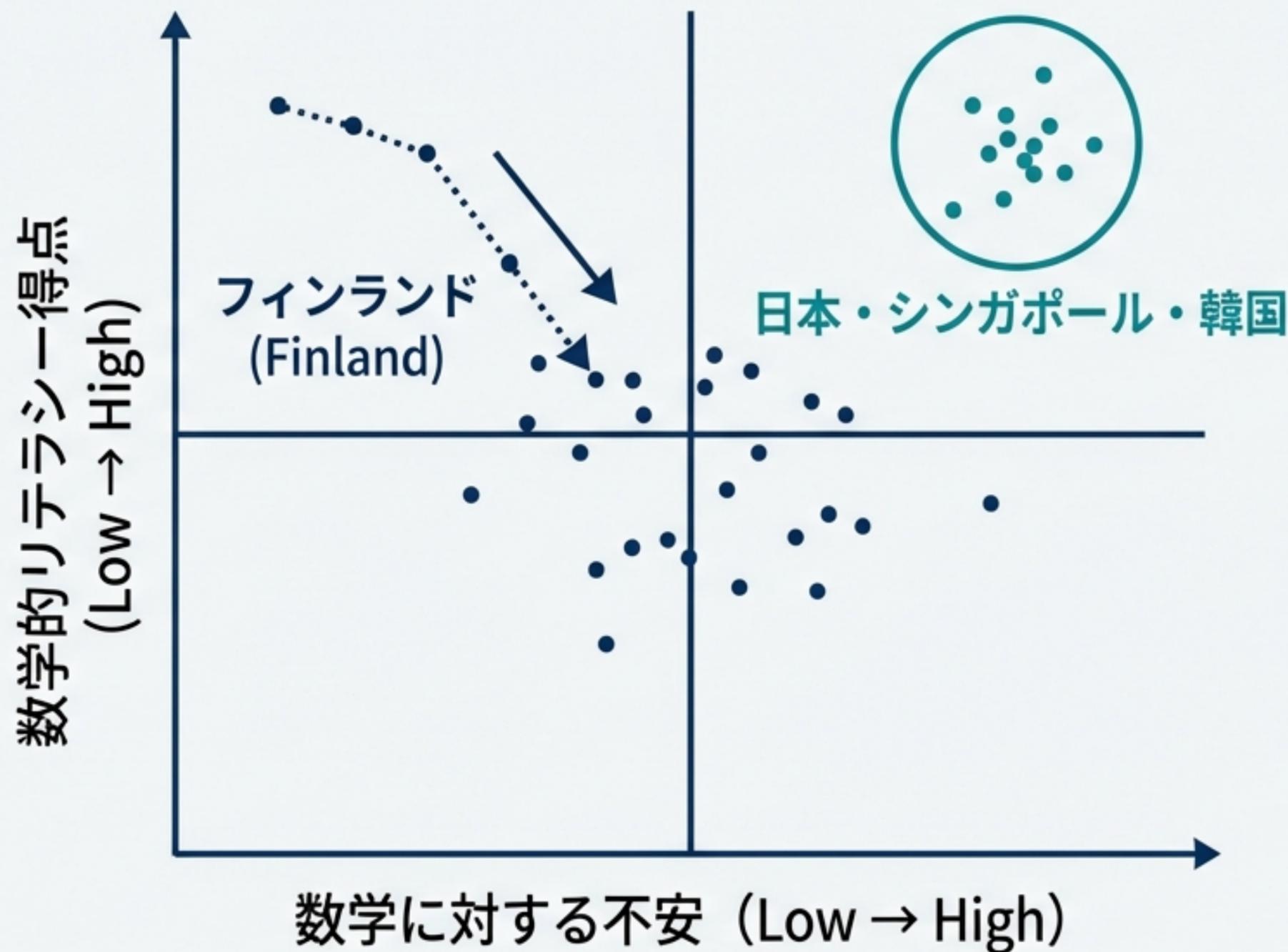


PISA 2022の現実：アジアの優位性と日本の底力



世界的な学力低下（コロナ禍の影響等）の中で、日本は「横ばい」、あるいはわずかな上昇傾向を維持している。上位はアジア勢が独占している状態にある。

「フィンランドの逆説」：幸福度と学力の相関



- 2003年 → 2022年: 数学・科学・読解の全分野でランキング急落。
- 授業への態度の変化:
 - 「授業で十分に学習できなかった」：フィンランド 28% (日本 12%)
 - 「教師の話を聞いていなかった」：フィンランド 35% (日本 6%)
- 結論: **適度な緊張感 (真剣さ) の欠如が、学力低下に繋がっている可能性がある。**

シンガポールの戦略：厳格な選抜と「ゆとり」の融合



厳格な選抜 (Rigorous Selection)

- PSLE (小学校卒業試験)
12歳で将来の進路 (コース) が実質的に決まる高ステークス試験。
「人材こそが最大の資源」という国家戦略。



創造的なゆとり (Creative Expansion)

- TLLM (Teach Less, Learn More)
教える量を減らし、探究の時間を確保する。
学校ではプロジェクトワーク (協働学習) を重視。

学校教育での「探究」と、試験対策での「知識」が、意図せずともハイブリッドに機能している。

「探究」の誤解：自由な調べ学習ではない

生徒が抱く「探究」のイメージ

- 教科横断的である
- 正解がない
- 好きに課題設定できる
- 社会課題（SDGs等）を扱う

GAP

本来求められる要件

- 方法論（Methodology）
- 科学的プロセス
- 実証的な検証

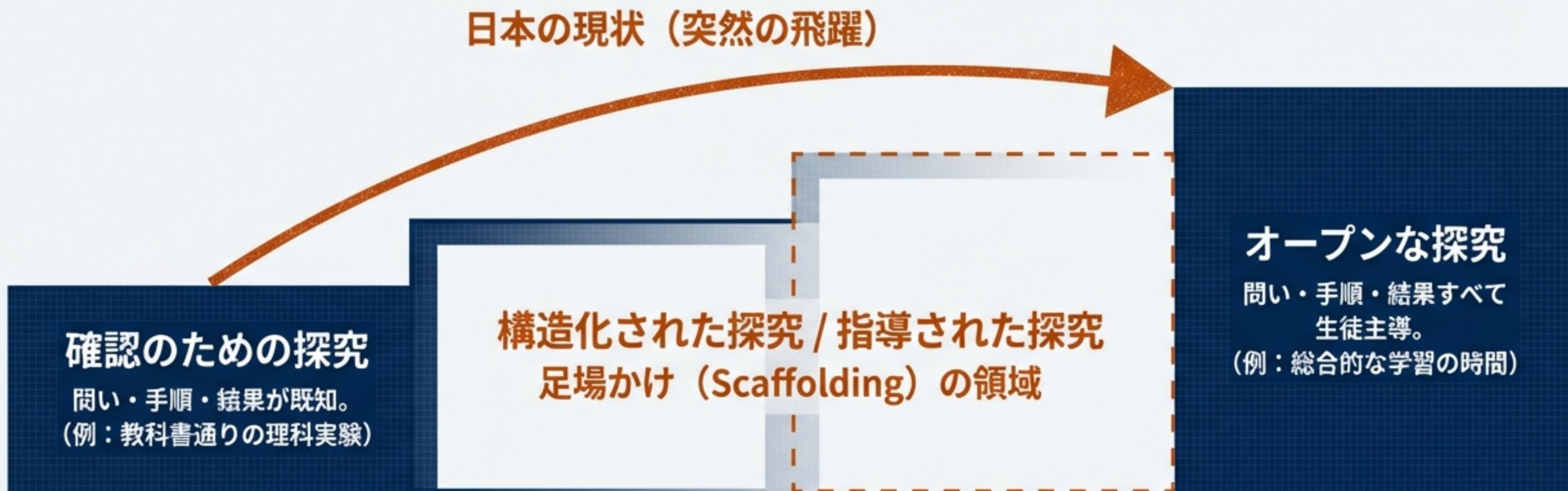
これら左側の要素が揃っていても、本来の「探究」とは限らない。
決定的に欠けているのは「方法論」である。

本来の探究＝科学的探究 (Scientific Inquiry)



単に「調べる」ことではない。各教科（特に理科）で学ぶ「手法」や「論理」
を使って、実証的に検証するプロセスこそが探究である。

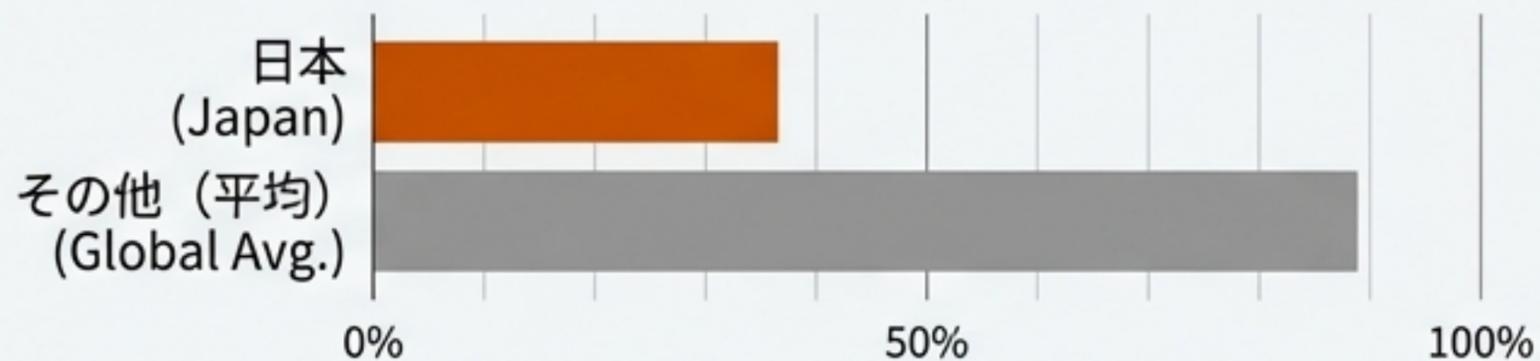
探究の4段階レベル：日本に欠けている「足場かけ」



Insight: Lv 1 (やらされる実験) から、準備なしに突然 Lv 4へ飛躍している。方法論の習得プロセスが必要。

「主体性」のパラドックス

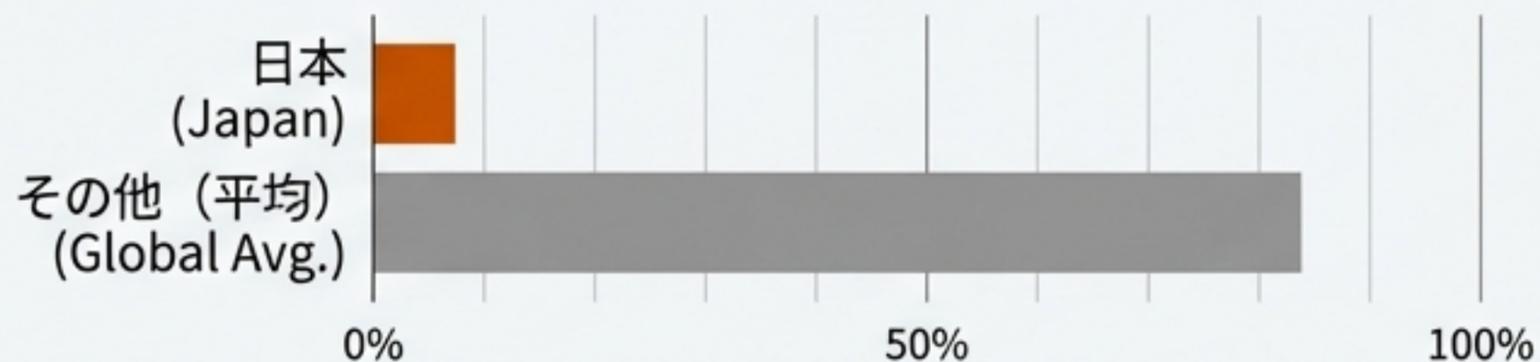
「自分は責任がある社会の一員だ」



スローガンとの乖離

学校目標や経団連が求める資質 No.1 は常に「主体性」。しかし、データ（日本財団 18 歳意識調査）は「社会を変える力」の圧倒的な欠如を示している。

「自分で国や社会を変えられると思う」



なぜ「主体性」を叫ぶほど、社会的エージェンシーは育たないのか？

真の主体性 (Agency) とは何か

OECDによる定義：「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」



偽の主体性 (Compliance)

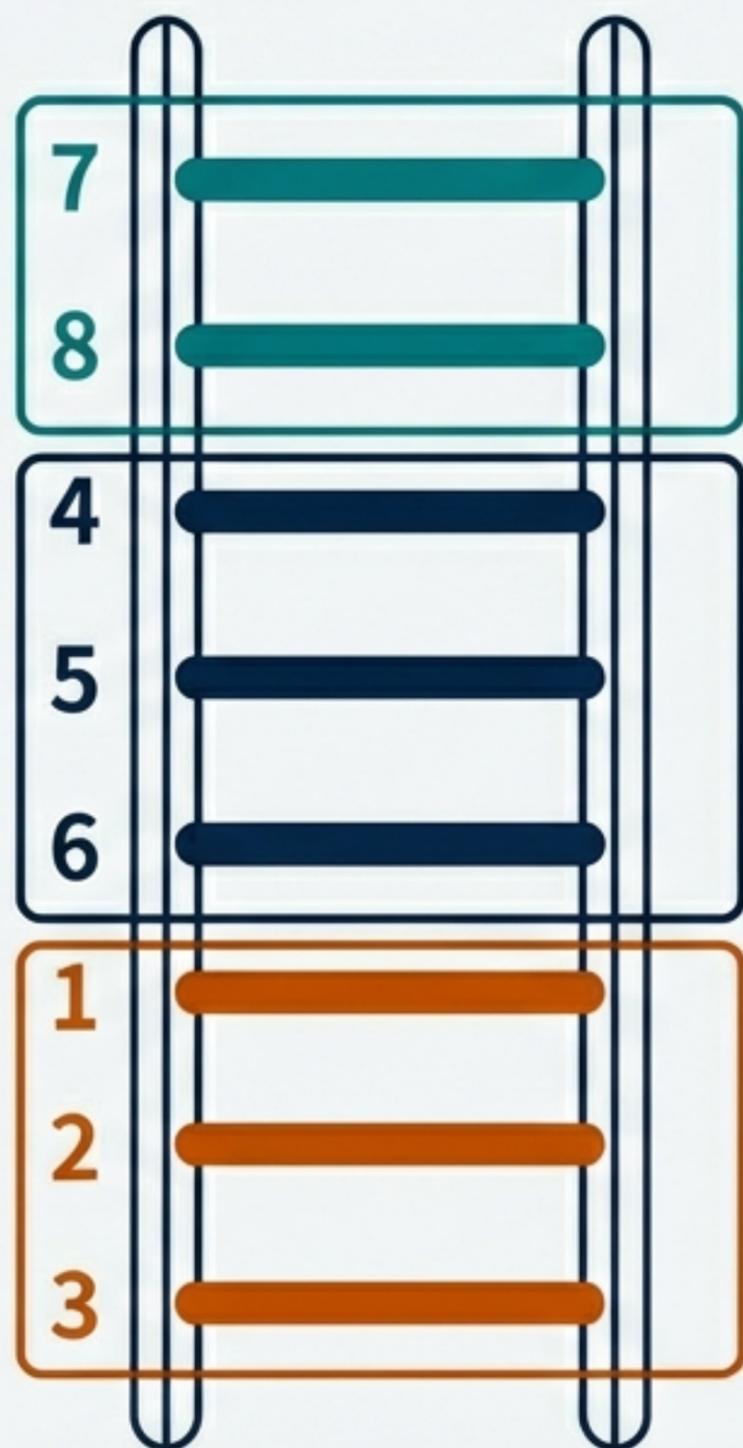
「重い」と文句を言いながら、与えられた課題 (宿題) をこなす勤勉さ。



真の主体性 (Agency)

「置き勉」のルールを作るなど、環境を変えるために働きかける行動。

「ハートの参画のハシゴ：教師と生徒の関係性」



パートナーシップ・意思決定

生徒主導。教師と共に決定する。
(例：放課後も自主的に議論を続ける)

意見表明・協議

意見を聞かれる・相談される。

非参加（操作・装飾）

教師の企画を生徒の発案に見せる等。

全てを最上段にする必要はない。
しかし、場面にに応じてハシゴを登らせる
指導（足場かけ）ができているか？

カリキュラム・オーバーロード：「総論賛成・各論反対」の罫

積載過剰 (Overload)

〇〇教育が増え続け、教員も生徒もパンク状態。

コンテンツ主義の限界

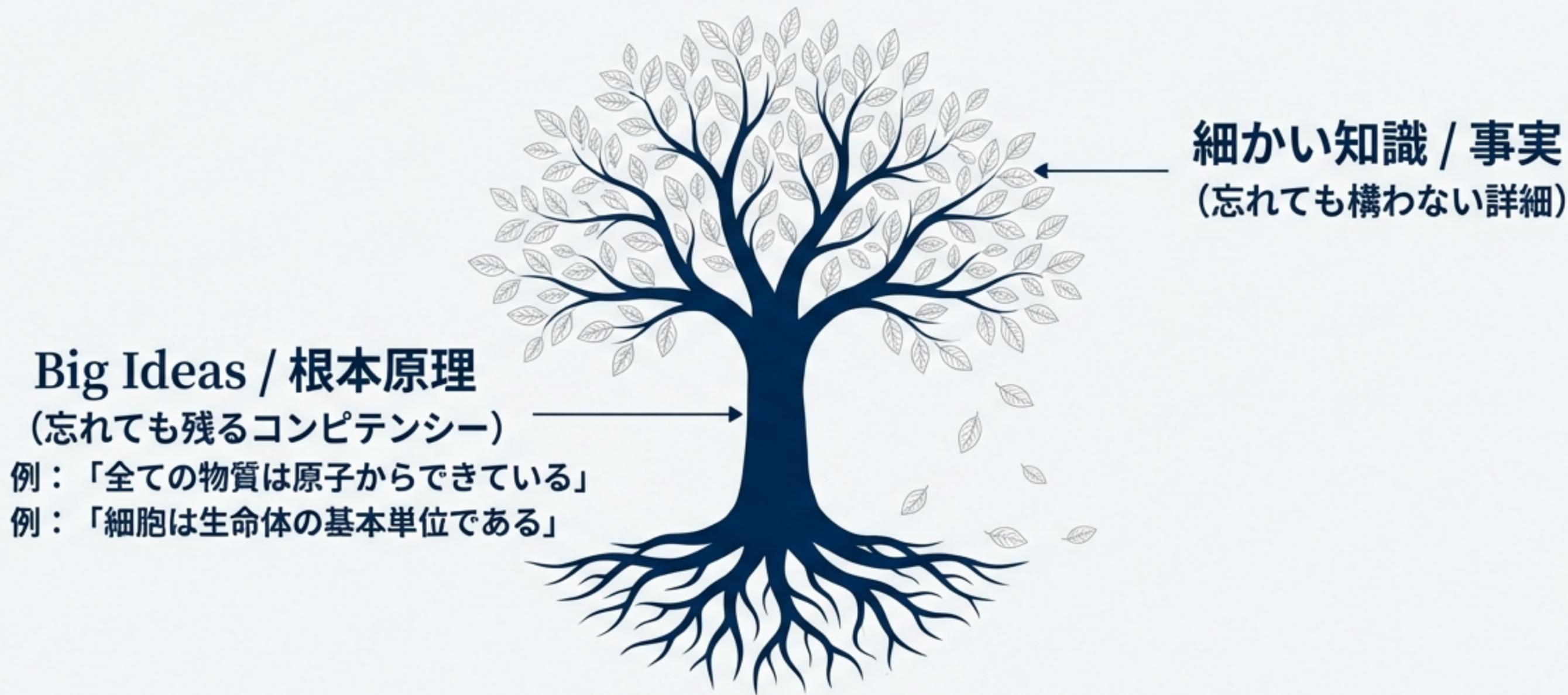
「教科書に載っていれば身につく」という幻想。



現場のジレンマ

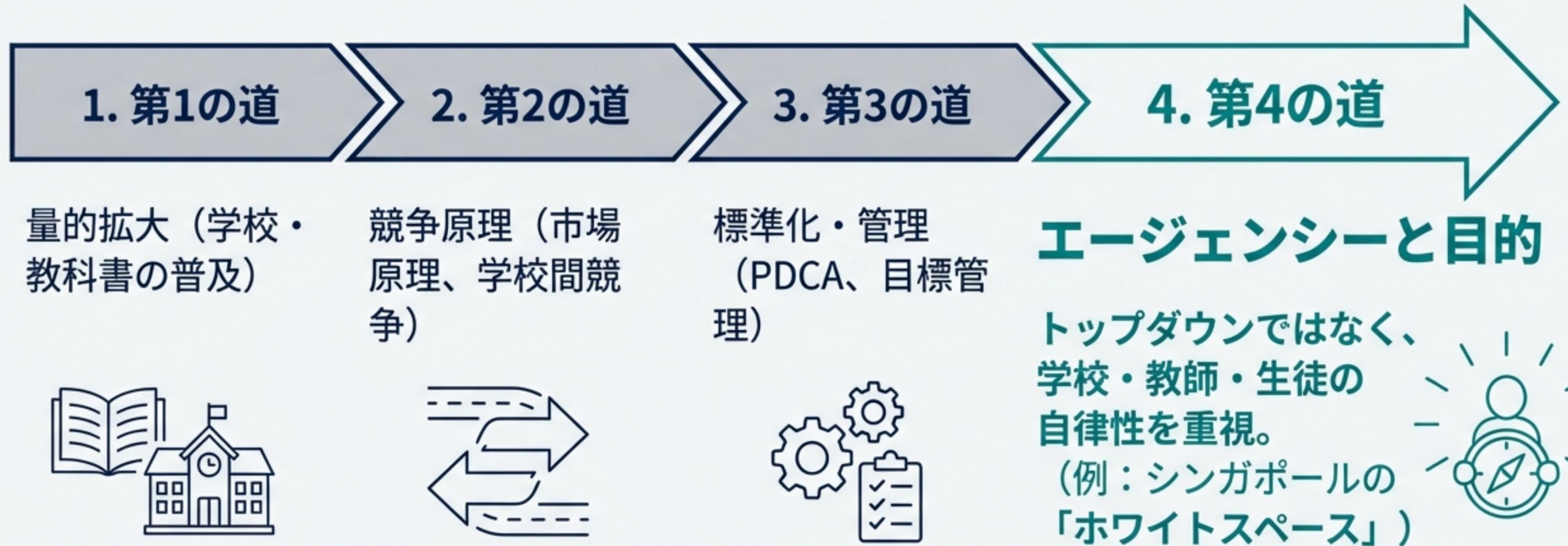
「削減は賛成」だが「私の教科書は削れない」という抵抗。
足し算だけの改革は限界に達している。

解決策：「ビッグ・アイデア（Big Ideas）」への転換



枝葉は忘れても構わない。この「幹」だけを徹底的に理解させることで、カリキュラムをスリム化し、質の高い探究へ繋げる。

教育改革の「第4の道」



教育のニューノーマル：学校をエコシステムへ

	Old School	New Normal
意思決定	一部の管理者（校長）	責任の共有（教師・生徒・地域）
学習内容	知識のインプット・再生	プロセス重視・コンピテンシー
評価	テスト中心	学習につながる評価
生徒の役割	受動的な聞き手（Consumer）	能動的な共創者（Co-creator）

教師も生徒も、共に「エージェンシー（変革する力）」を発揮する場所へ。